

神奈川県福祉作文コンクール 入選作品集



社会福祉法人 神奈川県共同募金会
社会福祉法人 神奈川県社会福祉協議会

まえがき

福祉作文コンクールは、昭和52年から始まり、今年で44回目となりました。次代を担う子どもたちに「たすけあい」や「思いやり」の心が芽生え、だれでもが「ともに生きる」社会が実現することを願って実施してまいりました。

今年、県内の小・中学校合わせて185校から5,666編の応募がありました。児童・生徒数が年々減少していく中で毎年多くの方に参加いただいています。

応募作品は小・中学生別に、県内市区町村ごとの地区審査会および県最終審査会を行い、このたび、最優秀賞16編、優秀賞20編、準優秀賞20編の計56編の入選作が決定いたしました。

本作品集は、入選作品の中から、最優秀賞16編を掲載したものです。どの作品も、体験や経験を通じて感じたこと、考えたことなどが自分自身の言葉で丁寧に書かれています。広く県民皆さまの目に留まり、お互いを思いやり、たすけあい、支え合えるような優しい気持ち

が社会全体に広がっていくことを願っています。

本来ならば、すべての入選作品をご紹介したいところですが、誌面の関係で、優秀賞及び準優秀賞は作品の題名・学校名・氏名を掲載させていただきましたので、ご了承ください。

なお、作品は、児童、生徒の気持ちを尊重し、原則として原文どおりに掲載しておりますこと申し添えます。

結びにあたり、コンクールに参加した小・中学生の皆さん、指導にあられた先生方、ご家族の皆さま、ご多忙のなか審査をお願いしました委員の方々に、心よりお礼申しあげます。

また、ご協力くださいました神奈川県、神奈川県教育委員会、各市町村教育委員会、日本放送協会横浜放送局、(株)テレビ神奈川、(株)神奈川新聞社、(公財)日揮社会福祉財団の皆さまに深く感謝申しあげます。

令和3年12月

**社会福祉法人神奈川県共同募金会
社会福祉法人神奈川県社会福祉協議会**

(順不同/敬称略)

審査にあられた方々	
日本放送協会横浜放送局 放送部 部長	小高純
株式会社テレビ神奈川 営業局次長兼営業推進室長	玉村裕之
株式会社神奈川新聞社 クロスメディア営業局 出版メディア部 部長	鈴木木毅
公益財団法人日揮社会福祉財団 常務理事兼事務局 局長	木高正志
神奈川県福祉子どもみらい局福祉部 地域福祉課 課長	垣中直也
神奈川県立総合教育センター 学校教育支援課 指導主事	角田弓江
社会福祉法人神奈川県共同募金会 常務理事	中島孝夫
社会福祉法人神奈川県社会福祉協議会 常務理事	井出康夫

中学生の部

最優秀賞

神奈川県知事賞 人間らしさを尊重することの大切さ	神奈川県立平塚中等教育学校	二年	會田 紫乃……………	17
神奈川県教育長賞 相手を思う気持ち	秦野市立西中学校	一年	飯塚 恵奈……………	20
日本放送協会横浜放送局長賞 小さな一言	平塚市立土沢中学校	三年	井上 南奏……………	23
t v k 賞 おじいちゃんに会いたい	伊勢原市立中沢中学校	一年	芹ヶ野 陸……………	26
神奈川新聞社長賞 「知る」ということ	葉山町立南郷中学校	一年	草柳 風太……………	29
ふれあい賞 社会の一員として支えたい	伊勢原市立伊勢原中学校	三年	長谷川千絢……………	31
神奈川県共同募金会長賞 福祉と障害と多様性	葉山町立南郷中学校	一年	小宮 一葉……………	34
神奈川県社会福祉協議会長賞 優しさのリレー	海老名市立柏ヶ谷中学校	三年	林 叶栴……………	37
優秀賞・準優秀賞入選者名簿……………				41

小学生の部

最優秀賞

神奈川県知事賞

2つの優しさ

伊勢原市立比々多小学校

六年 小笠原

清

私のお母さんは、リウマチと言う病気をもっています。リウマチと言う病気は関節が炎症をおこして、痛み、軟骨や骨が破壊されて関節の機能が損なわれてしまう病気みたいです。母がふと私に辛かったときの話を話してくれました。私はそのとき一年生だったので痛みなどよく分かっていませんでしたが、今その話を聞くとよく分かりました。そのときに、和田さんと言う方が助けてくれたことを聞きました。いろんな人が母に「なにかあったら言うてくださいね。」と言ってくれたようですが、頼むのが申し訳なくて、一人で頑張っていたようです。ですが和田さんと言う方は、「今から買ひ物に行くのでついでに何か買ってきますよ。」

など細かなことまで言ってくれたので甘えられたそうです。私はそのとき思いました。「なにかあったら言うてくださいね。」と言ってくれる人も、頼めないと思う母の気持ちも優しさからきていると思います。そこには壁ができていると思います。私はそれを優しさの壁と呼ぶことにします。母が甘えられたのは和田さんが壁を壊してくれたからだと思います。壁を壊すということはどういうことなのか？きつとそれは、和田さんが母のことを心配して何が不自由なのか何が不便なのか和田さんの生活の中に母を入れて優しさを配ってくれたから壁を壊すことができたんだなと思います。皆毎日自分の事で忙しいと思いますが和田さんのように誰かのことを思う時間を持つのはとても素敵なことだと思います。

これから私は和田さんのように壁を壊す優しさをするように意識していこうと思います。そして前になれなかった分、母の力になっていこうと思います。

最優秀賞

神奈川県教育長賞

しゆわ

南足柄市立南足柄小学校

一年 相馬 藤乃

わたしの、おかあさんのおともだちは、みみがきこえません。はじめてみてびっくりしました。なぜかというとはなしていたからです。わたしは、そのときからしゆわをならいたくなりました。そして、きのうしゆわきょうしつにいきました。みみがきこえないひとと、みみがきこえるひとでは、みためはぜんぜんわからなかつたです。みみがきこえないひととは、かみにかいたりくちをおおきくあけてはなしたり、てではなしたりするとおしえてもらいました。じぶんのなまえを、しゆわでできるようになってうれしかったです。ほかにも、おはようやごめんなさいなどおしえてもらいました。そして、みみがきこえないひとといっしょにあかずきんちゃんのおかげも、しゆわでやりました。おにいちゃんは、おむすびころりんの

げきをやっていました。とてもじょうずでした。

わたしは、これからもっとみみのきこえないひととたくさんしゆわではなしたいので、しゆわをたくさんしゆうしたいです。

とてもたのしくて、うれしいひでした。



最優秀賞

日本放送協会横浜放送局長賞

同じ時代を生きる

横浜市立勝田小学校（都筑区）

四年 小川 順 正

二年前の夏休み、ぼくは母の働く老人ホームにボランティアに行った。母が仕事をしている間、ぼくは、おじいさんたちとボードゲームをして遊んだ。昔、電気メーカーで働いていたというアオキさんは、ゲームの中でサラリーマンから社長になった。サッカーが好きなミヤザワさんは、スポーツ選手になった。ゲームの中では自由に夢が叶ってとても楽しい時間だった。

今度はぼくが、「子どものころどんな遊びをしていたのですか。」と聞くと、おじいさんたちは、少しこわい顔をした。そして、ぼくと同じ年ごろに戦争があつてほとんど遊べなかつたと話してくれた。戦争は遠い昔の事だと思つていたぼくは、悪い事を聞いてしまったと思

つた。そしてその日いっしょに遊べたことがなんだかとてもうれしく思えた。暗い顔をしたぼくを笑わせようと、たった二日間で校庭をイモ畑にした話をしてくれたサコタさんのドヤ顔はとてもやさしかった。

その年の二月、ぼくの通う小学校がとつぜん休校になった。新型コロナウイルス感染症のきん急事たいせん言が出されたからだ。出せない宿題、やりかけのレクのじゅんぴ、友だちにも先生にも会えなくなつた。

それなのに、母の仕事はかわらなかつた。コロナウイルスからみんなを守るため毎日大変そうだった。母の作ったおべんとうを食べながら、ぼくはいっしょに遊んだおじいさんたちのことを思った。みんなはどうしているだろうか。

コロナと戦う毎日、おじいさんたちが体験した戦争ににている気がする。今はがまんが Continuing、いつかその苦勞を笑つて話せる日が来るから。そう教えてくれたおじいさんたちとぼくは今同じ時代を生きている。いっしょにコロナをのりこえていこう。

最優秀賞

t v k 賞

声をかける？

相模原市立上溝南小学校（中央区）

五年 峠 芳道

— 7 —

「福祉ってなんだろう。」

ぼくは福祉のことをよく知りませんでした。調べてみると、福祉とはすべての人の幸福やいっしょに生きていこうと考えることと書いてありました。

この夏休み、ぼくは父とお使いに行きました。店内に入ると、赤ちゃんを抱っこしながら買い物をしているお母さんがいました。ぼくが会計を終えて店を出ようとしたところ、さっきのお母さんがエコバッグいっぱい荷物を持ちながらカートの片づけをしようとしていました。一声かけて代わりにカートの片づけをしました。店を出ると、階段があったのでエコバッグを父といっしょに持つてあげました。

「ありがとうございます。」

と、笑顔で言ってもらえました。その言葉を聞いて「お手伝いしてよかった。」と、さすががしい気持ちになりました。家に帰って家族とその話をしている時、少し気になることがあります。コロナウイルスが流行している今、他の人に自分の荷物をさわられたくないと考えている人がいるかもしれないことです。ぼくは困っている人を見かけたら知らん顔はできません。けれど今は手伝いを断られることもあるかもしれない。そう考えると少し気が重くなりそうです。すべての人の幸福やいっしょに生きていこうと考えること。それが福祉です。ぼくは、結果がどうであっても声をかけたいです。ふり返ってみると、ぼくも助けてもらったり支えてもらったりしています。相手の声に耳をかたむけて、何が必要なのか考えていきたいです。

「なにか手伝うことはありませんか。」

ぼくならこう声をかけます。できる時にできる人が行動する。これがぼくの思う福祉です。

— 8 —

最優秀賞

神奈川新聞社長賞

おばあちゃんの願い

開成町立開成小学校

四年 小栗 行真

ぼくは、福祉と聞いて意味がわかりませんでした。辞書で調べると、「人々が安心して暮らせる環境」と書いてありました。「福」も「祉」もどちらも「幸福」や「幸せ」を意味する漢字で、福祉は人の幸せと考える事ができるそうです。ぼくは、山北のおばあちゃんの事を思い出しました。

山北のおばあちゃんは、去年の八月に肝ぞうがんで亡くなりました。がんが進行し、お医者さんに「最期にすごす場所を決めて下さい」と言われ、おばあちゃんは「自分の家ですごしたい」ときぼうしました。おばあちゃんの願いを叶えるため、沢山の人がサポートしてくれました。お医者さんや看護師さんが家にしんさつに来てくれました。だんだん動くのが大

変になり、一人だとあぶないので、お父さんとおじさんが交代でつきそいました。お母さんとおばさんが食事を作り、手に力が入らないおばあちゃんのために、ぼくも食事を食べさせてお手伝いをしました。お風呂が大好きだったおばあちゃん。体が動かなくなり、ねたきりになってしまったので、訪問入浴かいこの人に来てもらい、お風呂にいれてもらいました。大好きなお風呂に入れて、おばあちゃんはニコニコ笑っていました。

八月十一日はおばあちゃんの命日でした。一年前、おばあちゃんのお世話をしている時は、福祉について考えもしませんでした。でも、おばあちゃんの願いを叶えるために、みんなでおばあちゃんを支えてあげた事が「福祉」なんだと今は思います。おばあちゃんの願いを叶えてあげる事が、おばあちゃんの幸せになるからです。願いを叶える事ができたおばあちゃん、天国でうれしい気持ちでいると思います。福祉をもっと知り、人の幸せのために自分のできる「福祉」を考えていきたいです。

最優秀賞

ふれあい賞

あの人に会ってから

伊勢原市立桜台小学校

五年 岩崎 仁子

私の家の前を時々、目の見えない人が通ります。白杖を持ったその人は、一本道をまっすぐ歩いていきます。

出会ったきっかけは、私と母が家の前にいた時、

「この先、車は停まっていますか。」

と、尋ねられたことでした。

「ここから先、車は停まっています。」

と、私は答えました。

よく思い出すと、その人は体の前に手をかざし、用心深く、車や何かにぶつからないよう

に歩いていました。見えている世界に慣れている私は分からなかったけれど、視覚のない世界では、障害物が予想できないので、私が想像する以上に激しくぶつかって、ケガを負う可能性があるのかもしれない。

その後も度々、その人に会いました。特に登校時にすれ違うことが多く、

「おはようございます。車は、停まっています。」

と、私は話しかけました。

「ありがとうございます。今日も暑いね。」

と、その人は笑顔で返してくれて、私はとても嬉しくなりました。

私は、人と話すのが大好きな性格なので、友達が増えたような気がして、ウキウキしました。今まで、目の見えない人を見かけても、どこか別の世界のことかと思っていました。しかし、目の見えないあの人に出会ってからは、身近に感じられるようになりました。

周りを見ると、近所の人達はその人の手を肩にのせて誘導したりと色々な手助けの仕方があることも分かりました。目の見えないあの人に出会えたことで広がったこの世界で、私のできることを探し実行して、色々な人と助け合いたいと思います。

最優秀賞

神奈川県共同募金会長賞

コロナのなかでもできること

横浜市立桜岡小学校（港南区）

四年 田中 紳 慈

ぼくのおじいちゃんはこの夏、特別養老老人ホームに入りました。三年前、お医者さんにアルツハイマー型にん知しようと言われたおじいちゃん。それでもおばあちゃんと二人でくらしでしたが、家の階段や道路で何度も転び、顔や頭にけがをして救急車で病院に運ばれてばかり。三十年も住んでいた家ではくらせなくなってしまう。

ぼくは毎年、お正月には一緒にぎょうざを作って、食べるのが楽しみでした。

しかし去年、コロナウイルスの感染が広がってからは、おじいちゃんに会えなくなりました。電話では何度も話しているのですが、何だか、ぼくの言っていることがほとんど分からなくなっている気がしました。

お父さんは休みの日、おじいちゃんの家に行ったり、仕事を休んで病院に連れて行ったりすることが増えました。

ぼくは、お父さんに話したいことやしてほしいことがあってもがまんしました。

お父さんは五月五日、おじいちゃんのワクチンを予約するため、朝からずっとパソコンの前にすわっています。「なかなかつながらない」とお父さんはイライラ。ぼくはとなりで「パソコンががんばれ」と何度も言いながら、お父さんをはげめます。お父さんも、笑顔になっ

て画面を見えています。
一時間半後、ようやく予約が取れました。お父さんは目になみだをためて「しんくん。ありがとう」とぼくをだきしめました。

この日予約が取れたおかげで、おじいちゃんはワクチンを打ってからホームに入ることができ、今も元気にくらししています。

おじいちゃんに会えないのはさびしいけれど、ぼくにもできることはある。これからは、ほかのお年よりのためにも、自分のできることを探し積極的に取り組みたいと思います。

最優秀賞

神奈川県社会福祉協議会長賞

声をかけるゆう気を持ちたい

横須賀市立田戸小学校

三年 山脇 誇子

私はこのまえ、母のすすめで姉とオンラインのワークショップにさんかしました。「ひやまっち」と「きのつぴい」とお話しして、感じたことを書きたいと思います。

二人は目が不自由です。私は目の不自由な人と話したことがないので、どうしたらいいのかわかりません。そうしたら、「ひやまっち」に、声を出してほしいって言われました。でも、オンラインもなれていないし、ゆう気がなくて、私は声を出すことができませんでした。

とちゅうで「ひやまっち」から信号について話がありました。音の出ないしんごうは、目の不自由な人にとって信用できないものだそうです。うちの近所にも音の出るしんごうは二つありますが、ほとんどのしんごうは音が出ません。

「ひやまっち」は、人の足音や車のとまった音を聞いて、しんごうをわたっているのだそうです。それを聞いて、私はすごいなあと思いました。今まで、音は気にしてませんでした。ワークシヨップのあと、しんごうをわたる時、耳で聞いてみましたが、足音なんてほとんどわからないし、車の音もたくさんします。目の不自由な人は、しんごうをわたるのも大変なことなんだって勉強になりました。

本当は、音のあるしんごうをたくさん作ってほしいけど、すぐには作れないと思います。でも、しんごうはあぶないです。他にもあぶないところはたくさんあると思います。

私のできることで、音のなるしんごうがたくさんできるまで、しんごうの前で、困っている人を見かけたら、まだ一人でははさかしいので、姉やお友達と一緒にゆうきを出して、話しかけたいと思います。なかなか声をかけられないかもしれないけど、ゆう気を百倍にして、頑張りたいです。

中学生の部

最優秀賞

神奈川県知事賞

人間らしさを尊重することの大切さ

神奈川県立平塚中等教育学校

二年 會 田 紫 乃

私の祖母は認知症です。祖父が他界してから一人で生活していましたが、言動が少しおかしかったため、病院で調べてもらったところ、認知症だと分かったそうです。記憶が曖昧になって不安になるので、パニックになり母に電話をしてきたり、物をしまった場所を忘れて、盗まれたと勘違いしたり、徐々に様々な症状が出てきました。一人で生活をさせるのが心配だった母は、祖母を我が家へ連れてきて、暫くの間、一緒に生活をしました。

我が家はもともと父方の祖母と一緒に住んでいるため、母方の祖母が我が家にやってきた時は、祖母が二人いてかなり賑やかになりました。私は二人の祖母が大好きなので、とても

嬉しかったのですが、暫くすると色々な事が起こりました。

ある日のこと、祖母が財布がないとパニックになっていたので、みんなで財布を探しましたが風呂場で財布を見つけたので、小言を言いながら財布を持っていくと「やっぱりあなたが盗んだ」と今までに見たことのないような目で母を睨みつけていました。自分のせいにはされた母は泣き、それを見た祖母も盗まれたと泣き、大騒ぎになりました。そんなことが繰り返し起こり、母はネットで認知症の対処方法を調べ始めました。

認知症の方への対応で一番大事なことは、不安にさせない事です。認知症になると、いろいろなことができなくなり、コミュニケーションが取れなくなってしまう一方で、相手の顔の表情だったり、言動には今まで以上に敏感に感じ取るそうです。認知症の方は、とても繊細なんだと初めて知りました。

母は私たちにも、次に何かあった時には、必ず大丈夫だよと笑顔で接し、手を繋いだりするといいということを教えてくれました。

暫くして、祖母がまた財布をなくしました。私は、「大丈夫、絶対どこかにあるから一緒に探そう。」と笑顔で祖母に話し、不安にならないようにしました。財布は母が見つけたのですが、母は財布をそのままにして、祖母をその場所に誘導して、祖母が自分で見つけたように演じました。すると、祖母は「こんな場所にあったわ。」と前回のようなパニックにもならず、みんなが笑って事が済みました。私も「良かったね。」と言うと、祖母は「一緒に探してくれてありがとう。」と笑顔になりました。

私は、このような経験をし、認知症の方は接し方によって言動が変わってくるのだということに気づき、この接し方について調べてみました。

認知症のケアのひとつとしてユマニチュードという技法があるそうです。ユマニチュードとは、人間らしさを尊重するという意味があり、ケアをする人は、ケアを受ける人に、「あなたを大切に思っています」「あなたはここにいますよ」ということを接し方で伝えるそうです。水平な高さは「平等」、正面の位置は「正直・信頼」、近い距離は「優しさ・親密さ」、時間の高さは「友情・愛情」というメッセージが伝わることで、穏やかになるそうです。認知症の方と接していると、ついイライラしてしまい、辛くあたってしまうこともあります。このような技法を全ての人を知り、寄り添っていけば、認知症の方も普通の生活が少しでも長くできるのではないかと思いました。

祖母は、我が家にくると、洗濯と掃除を嬉しそうにやってくれます。洗濯と掃除をしている時の祖母の顔はとても生き生きしています。私は、いつまでも、そんな笑顔の祖母を見たいなと思いました。

最優秀賞

神奈川県教育長賞

相手を思う気持ち

秦野市立西中学校

一年 飯塚 恵 奈

私の三つ上の兄は自閉症です。自閉症とは発達障害の一つで、コミュニケーションが上手に取れず、相手の気持ちや状況を読み取ることが苦手です。そのため、私もたまにイライラしてしまいます。

私が小学生の頃までは、兄に話しかけても兄に興味のないことは、全く反応してくれず無視されてばかりでした。私は、その態度に腹が立ち怒ってしまったことがあります。すると兄は、とたんに大きな声を上げ「ドンドン」と机を強く叩いていました。私はとてもびっくりしました。このように、自分の思っていることを言葉でうまく言い表せなかったり感情をコントロールすることができません。自閉症の兄にとって、いつも通りに話しているつも

りでも、相手を不快にさせてしまったり、怒らせてしまうことがあります。すぐに怒ったりパニックになってしまう原因は私にもあると感じました。私は兄の態度に対して、怒りのあまりに感情的になり、かなりきつい言い方になっていました。私は、怒るのではなく注意してお願ひした方が良いということに、気が付きました。そうすれば、兄も納得して怒らないだろうと思ったからです。

兄は、何かをする時の方法や手順、物の並べ方などにも自分のこだわりがあり、いつも同じ様でないと気が済みません。また、その場に合わせて臨機応変に対応することが苦手です。いきなり「これやって」と言っても引き受けてもらえないことが多いので、兄に頼み事をする時は、早めに声をかけ、知らせておくことを心がけています。そうすれば、兄も心の準備のできるのでスムーズに動くことができます。

私が小学三年生の頃、兄は六年生でした。ある日、友達から「恵奈のお兄ちゃん、うるさすぎる。変人みたい。」と言われました。私は「あはは。」と苦笑いすることしかできませんでした。友達に笑われるのが怖かったのと兄が自閉症だということを知られるのが恥ずかしいと思っただけです。また「兄のことをみんなどう思っているのだろう」とずっと気になっていたので、兄に障害があることを友達に言えませんでした。友達との何気ない会話でしたが、笑いながらも本当は嫌な気持ちでいっぱいでした。私はその時、友達に兄が自閉症であることを伝えていれば、少し気持ちを分かってくれたのではないかと今では思っています。

自閉症の兄といて困ったことや大変だと思ふことが今までたくさんありましたが、兄は集

中力や記憶力が良く、暗記が得意など素晴らしい所もたくさんあります。兄と一緒にいると、とても元気をもらえます。辛くて泣きそうな時も、兄なりの言葉で励ましてくれます。その言葉は少しきこえないですが、とてもうれいす。

今、私が中学生となり兄とはたくさん話しができるようにになりました。なぜなら兄の特性が分かるようになり、頼み事をする時は早めに伝えておいたり、怒るのではなく、注意してお願ひするように心がけているからだと思います。

私は、友達に対しても何かを言う前に頭の中で、本当に言うて良いことなのか悪いことなのかを判断するように気を付けています。なぜなら、友達と話す時には楽しくて気持ちが良いか、思っただけをそのまま口に出してしまい、相手に嫌な思いをさせてしまうのではないかと思うからです。一度口に出した言葉は取り消すことができないので、相手の気持ちを考えて行動することが大切ではないかと思ひます。また「自分が言われて嫌なことを言わない」という当たり前のことを一人一人が心がければ、自閉症であるなしに関係なく、みんなが気持ちよく過ごせるのではないかと思ひます。

最優秀賞

日本放送協会横浜放送局長賞

小さな一言

平塚市立土沢中学校

三年 井上南奏

私の祖母はいつも財布がパンパンだ。それは、祖母が特にお金持ちだからとか、カード類が沢山入っているから、などというわけではない。

私はある日、祖母と一緒にスーパーマーケットへ行った。その日は特に混んでいて、レジがすごく並んでいた。商品を選び終わってレジの行列に並び、やっと私達の順番がまわってきた。会計になると、祖母は財布から早くお金を出そうと、焦っていた様子だった。会計金額が細かくて、小銭を出す事に時間がかかってしまったのだろう。さらに、後ろに沢山のお客様が並んでいた事も、プレッシャーになったのだろうか。祖母の手は少し震えているように見えた。そうするとレジの店員さんが、

「ゆっくりで大丈夫ですよ。」

と優しく言ってくれた。後ろで並んでいる人も、うんうんと頷いていた。祖母はその一言のおかげで、落ち着いて会計を終える事ができた。

私はこの一連の流れを見ていた時、祖母の財布が何故パンパンなのかを疑問に思っていた。そしてその帰り道、祖母に質問を試してみた。

「なんで財布がそんなにパンパンなの？」
すると祖母は、

「会計で混んでいると、焦っちゃってお札を出しちゃうんだよ。だから、お釣りの小銭が溜まっちゃうんだ。」

と、答えた。そして続けて、

「だから、さっきみたいに店員さんに言ってもらえると、本当に助かるんだよね。」
と、嬉しそうに言った。

実際に、高齢者の方は会計で焦ってしまいう人が多いらしい。会計が遅いことによって舌打ちをされたり、周囲からの視線が気になったりと、状況が悪化する事もあるという。祖母はセルフレジを使おうとしても、慣れない操作で余計に時間がかかってしまうとも言っていた。

高齢者の方が日常生活の中で困っている事は沢山ある。例えば、電車に乗るために駅を利用する時だ。駅では急いでいる人が多く、歩くスピードが全体的に速い。しかし、高齢者の方の中には速く歩くことが困難な人もいる。それでも周りに合わせようと歩くと、少しの時

間でも疲れてしまう。切符売り場や改札を通る時も、スーパーマーケットのレジと同じような理由で焦ってしまう事があるだろう。他にも、エレベーターやエスカレーターが無い所などは、高齢者の方が不便に思う場所のひとつだ。階段の上り下りは、足腰の弱い人にとっては一苦勞だろう。私の祖母も、

「階段を上るだけで疲れちゃうなあ。」

と、愚痴をこぼしていた。

そんな高齢者の方のため、私にも何かできる事がないか考えてみた。手助けをしてあげる、など直接手伝う事も大事だろう。しかし、常に高齢者の方の手助けができるわけではない。そこで私は祖母の言葉を思い出し、一言だけでも声をかけてあげる事が大切なのではないかと思った。その一言によつて、祖母のように少しでも安心してもらいたいからだ。

人間は誰もが老いる。高齢になり、日常生活に支障が出てくる事は避けようがない。私たち若者も、そのうち高齢者の立場になる。その時に、私たちも誰かに支えてもらえるように、いま自分には何ができるのか考える必要がある。私の行動で誰かを助ける事ができれば、その人も誰かを助け、またその人も誰かを助け、きつと良い連鎖が起こるだろう。きつとその行動は、巡り巡つて私たちが高齢になった時に返つてくると思う。

自分にとつては小さな一言でも、相手にとつては大きな一言になる。それを心に、私は積極的に声を掛けていこうと思う。

最優秀賞

t v k 賞

おじいちゃんに会いたい

伊勢原市立中沢中学校

一年 芹ヶ野

陸

「お父さん、わかる？元氣だった？楽しみにしていた東京オリンピックが始まったよ！日本選手も頑張ってるよ！」

母が、画面越しにそう声をかけると、おじいちゃんをつぶっていた目がちよつと開き、「おー。」

と言う小さな声が聞こえました。おじいちゃんが動く姿を見るのも、声を聞くのも久しぶりで、ほくはとでもうれしかったのですが、前に会った時より小さく、細くなった姿に、とても心配になりました。

昨年、コロナウイルスが感染拡大し始めた頃、おじいちゃんは二度目の脳出血を起こし突

然倒れてしまいました。すぐに手術をしましたが、体にまひや障害が残り、自宅に戻ることができずに入院生活を送っています。コロナウイルス感染予防のために、同居するおばあちゃんできえも直接会うことができなくなり、一年以上が経ちました。オンライン面会をすることができるようになりましたが、二週間に一度、五分間だけと決められています。おばあちゃんやいとこたちと順番に面会をしています。学校がある時は面会時間が合わず、ぼくがおじいちゃんと画面越しに会えたのは、倒れてしまつて以来、一年以上ぶりでした。

おじいちゃんは、脳出血を起こす前から認知症の症状がありました。たびたび自宅から居なくなつてしまい皆で探したり、食事をしたことを忘れてまたすぐに食べようとしたり、おじいちゃん自身でもどうすることもできない症状が次々に現われました。段々とおばあちゃん達の負担が大きくなり、デイサービスの利用をすすめられたこともありました。しかし、おじいちゃんはとてもいやがったそうです。ぼくは、その時のおじいちゃんの気持ちがあんなとなくわかるような気がしました。

自分が不安な状態の時に、慣れない場所で知らない人たちと接することは、ぼくだって怖いからです。でもこのままだと、おばあちゃんたちも体をこわしてしまうかもしれない。おじいちゃんおばあちゃんにとつて、どうしてあげるのが一番いいのだろうと皆で考えている時に、おじいちゃんは倒れ、長く入院することになってしまいました。

今、おじいちゃんは、二十四時間体制で病院や介護スタッフの方々に支えられています。オンライン面会をしている時も、おじいちゃんがぼくたちの顔をよく見えるように、体や顔

を支えてくれたり、うまく話せないおじいちゃんの言葉を、代わりにぼくたちに伝えてくれたりします。病院にはおじいちゃんだけでなく、他にもたくさん入院している人たちがいます。その人たちにも、おじいちゃんと同じように接して、お世話をしなければなりません。コロナウイルスの感染拡大がおさまらず、介護に関わる人たちもきつと、いつ自分たちが感染するかわからない不安の中で働いていると思います。それでも、いやな顔一つもせずにおじいちゃんたちに接してくれている姿を見て、ぼくは胸がいっぱいになりました。

オンライン面会で見たおじいちゃんは、やせてはいましたが、とても安心した表情をしていました。以前、家族以外との関わりをとめて嫌がっていたおじいちゃんの心を変えたのは、ぼくたちではなく、今も一生懸命支えてくれている介護スタッフの方々だと実感しました。コロナウイルスがおさまつて、病院で面会できるようになったら、ぼくは直接感謝の気持ちをお伝えたいです。そして、おじいちゃんに会ったら、おじいちゃんが何よりも楽しみにしていた東京オリンピックの話をお聞きしてあげたいです。

最優秀賞

神奈川新聞社長賞

「知る」ということ

葉山町立南郷中学校

一年 草柳 風太

この夏休みに東京オリンピックが開催された。なんとなく見始めた開会式は僕の大好きなドラクエの音楽から始まったのでうれしくなった。他にも数多くのドローンが地球を形作って浮かび上がった。ピクトグラムをパントマイムで表したり、気が付くと夢中で見ていた。

その途中でふと、気付いたことがあった。それは、僕が見ている放送では手話通訳の人が出ていなかったことだ。僕がそう思ったのには理由がある。僕の1学年上の姉には聴覚障害があるからだ。姉本人は全く気にしていなかったが、4年に1度のオリンピックは国民だけでなく、世界の人が注目しているはずだ。姉と同じ聴覚障害の人々もたくさんいるのにも思っていたのだ。僕の家ではいつもテレビの字幕が出るようにしているが、生放送の字幕はどうし

てもずれてしまう。姉も時間差が苦手で、いつも途中で見るのをやめてしまう。開会式のテーマの一つに「多様性と調和」というものがあったが、僕はなんだかもやした気分が残った。

日本は今までで一番多くのメダルをとってあつという間に閉会式の日になった。閉会式も手話通訳はないだろうなと思いつつも閉会式を見てみたら、手話通訳の人が常に大きく出ている画面で放送されていたのでびっくりした。開会式で僕は疑問に思っただけで終わってしまったが、きつとたくさんの聴覚障害の人たちが僕と同じように感じて、放送する人たちに気持ちが届いたのだと思った。僕は嬉しくなって母に話をした。母と一緒にSNSで調べてみたら、同じように喜んでいられる方々や聴覚障害の方がたくさんいた。

しかし、その喜びの声よりも大きく話題になっていたのが「手話の人の動きや顔が笑える」などの声だ。僕はそれを見て複雑な気持ちになった。手話を使う人は表情と体や手の動きで気持ちを伝えるので、当然全てが大きくなる。僕も姉には目を見開いたり、口を大きく開けたりしながら手話と指文字を使って会話をしているの、それを笑われたように感じてしまったのだ。でも、それをつぶやく人たちはみんな好意的に見ているのがわかった。「知らないだけ」なのだと思いついた。

このことがきっかけで手話通訳のことに限らず、たくさんの方が色々なことを「知る」ことが何より大事で、知っているのと色々なことを自然に受け入れたり、話し合えたりすることができるように思う。そこから本当の「多様性と調和」の世界が見えてくるような気がした。

最優秀賞

ふれあい賞

社会の一員として支えたい

伊勢原市立伊勢原中学校

三年 長谷川 千 綯

部活を終え夕暮れ時に帰宅している時だった。交差点から一人で歩いていた私は、前の方の高齢の小柄な女性が独り、私の方に向かって歩いて来る姿を見つけた。夕暮れにしてもまだまだ蒸し暑い季節だったが、その女性は、季節に似つかわしくないニットの上着にウールの帽子を被られていた。

ゆっくりと、でもはっきりと私の方を見て何か話されている。やがて私は会話を交わせる距離まで近づいた。

立ち止まった私に向かって、その女性は、この辺りでは聞いたことの無い駅名を言い、駅はどこかと言われた。近づいてから気付いたがその女性の靴はどう見てもサイズの大きい男

性用の物をひっかけるように履かれていた。何か違うと私は感じていた。

私は何から話そうか迷った。この状況は、介護のテレビ番組を見た時、認知症の高齢者が、独り道に迷っている場面を再現しよう対応するかを伝える内容の回があり、その内容と似ていたのだ。視線を合わせてゆっくり話しかけようとか、出来るだけ否定しないように聞こうとか気持ちに寄りそった言葉掛けをしようなど、思っただけでも、急には出てこなかった。実際行動に移すのは案外難しい。

困っていたところ、帰宅途中の大人の方が状況を察して、私に代わって女性の話を聞き携帯から警察に連絡をして下さった。

新聞で認知症の行方不明者は年間一万七千人を超えると書いてあった。私の住んでいる自治体では防災行政用無線を使って依頼のあった行方不明者についての放送は随時されており、このことは日々身近で起きている事なのだと思った。

介護のテレビ番組を見ていたのは高齢者福祉施設で働く母の影響だった。特に興味がある訳ではなかったが小学校低学年頃まで母の職場について行く事があり、なんとなく見ていた。

母に下校途中にあった出来事を話した所、認知症サポーターについては話と、そのことについて過去の新聞記事を見せられた。認知症サポーターとは、認知症について正しく理解し、偏見を持たず地域で認知症の人やその家族を温かく見守り、気持ちを理解し、出来る範囲で手助けする事が出来るよう受講し養成されるもので、大人でなくても受講出来ることだった。母の話では日常的に家族や仕事で支援者として関わっていても、なかなか正しく理解

し接することは難しく丁寧に接する事が難しくなる時もある。どんな人にも受講の意義があるし、人口の高齢化が加速して支える人が減る一方の現代、家族や介護施設だけでは支えきれなくなってしまう。社会全体で支えていけるように、普段あまり接する機会がない人が受講する機会が増える事はもちろん良いと思う、と話していた。私は新聞記事であったような学校での出張認知症サポーターの講座があれば、これからの高齢化社会を担う私達の知識の一つとして不可欠なものになるのではと思った。

現代、ネット社会となり顔認証システムを用いたネットワークカメラの普及などシステム設置や設備の普及も多く進んでいるとの事だ。居場所認証も出来れば探しやすいものになると思う。ただ、機械がどんどん普及していても、私が下校時に出会った駅を探していた高齢の女性の方に対応して下さった方の様に人が関わらないと助からない場合もあると思う。私も知識を行動に移せる、社会の一員として成長したいと思う。

最優秀賞

神奈川県共同募金会長賞

福祉と障害と多様性

葉山町立南郷中学校

一年 小宮 一葉

「二葉はもしかしたら障害があるかもしれないね。」

ある日、母にそう言われた。どうやら私の父はアスペルガー症候群という発達障害らしい。発達障害（アスペルガー・ADHD等）の遺伝率は八〇パーセント近くあるそうだ。私は発達障害というものを、もつと詳しく知ってみたいと思いつつ自分なりに調べることにした。

まず、発達障害とは生まれつきの脳の特性であり「病気」とは異なるものだということが分かった。脳の発達が通常と違っているために、特定のことには爆発的な能力を発揮する一方で、ある分野は極端に苦手といったことが生じやすいそうだ。そして発達障害は見た目だけではわかりにくい。

私が入社していろいろと調べてみて知ったことは想像以上に自分に当てはまることが多かったことと、もう一つは虐待やいじめにあう方が多いということだ。まず、自分自身当てはまることが多いというのは、私が入社のごとに集中するのが苦手だからだ。とくに人の話を聞くのが苦手で注意されたことを忘れてしまったり、何度怒られても同じことをくり返してしまったりする。忘れ物も明らかに周りの人より多い。今度こそ集中しようと思っても気が付くと全く違うことをしていたこともあった。だが絵を描く時や小説を読む時は周りが見えなくなるほど集中できることもある。このことから私が考えているよりずっと、障害に悩んでいる人が身近にいるのではないかと思った。もう一つの虐待やいじめにあう方が多いというのは、さらに深掘りするためインターネットの掲示板サイトを使い様々な人の意見を見てみた。そこで、とある書き込みを見つけた。内容は「障害者枠の職場でいじめられている。」というもので会社で周りの人と同等に扱ってもらえず避けられていることを悩んでいる、というものであった。それに対しての書き込みは思っていたより冷たいものが多く「障害者枠で採用されている時点で仕方がない。」や「健常者と同等に仕事ができるなら一般採用で良いのになんで障害者枠にしたの?」という書き込みもあった。とくに印象的だったのは「自分を特別扱いしてほしいだけ。」というものだ。こういう考えをする人もいるんだなと、知ることができた。あらためて、「身体・知的・精神」と様々な障害があり多様性を受け入れる世になる中偏見や差別的考えをする人はまだまだいるものだなと感じた。だが障害者「だから」仕方がない、障害者「だから」優しくする、といった考え方もまた差別だと私は思う。障害は特性であり



個性であり才能なのだとは私は強く感じている。一つだけの考え方や一人だけの人が絶対に正しいなんてことは無いと私は思う。だからこそ、個々を尊重し合い認め合えるような社会になってほしいと思うと共に私も人を想いやつていきたい。

最優秀賞

神奈川県社会福祉協議会長賞

優しさのリレー

海老名市立柏ヶ谷中学校

三年 林 叶 椛

「赤い下地に白の十字とハートのマーク」みなさんは何のマークかご存知ですか？これはヘルプマークと言います。最近では駅のポスター等で見かける人も多いのではないのでしょうか。

私もヘルプマークを知りませんでした。以前友人と出かけた時、自分達より少し年上の人とすれ違いました。外見は私達と何も変わらないのに、その人のカバンにはヘルプマークが付いていたのです。

「何のマークだろう。」
と帰宅後すぐに調べ、ヘルプマークを知りました。ヘルプマークとは、外見では分からない病气やけがを持っている人が周囲に示すための物であり、平成二十九年に始まった制度です。

裏面には自分がどのような病气や障がいを持っているのか、またどのようなサポートを必要としているのかなどを詳しく書いてあることも知りました。開始からまだ四年。自分もそうだったように、まだこのマークについて知らない人も多いのだろうとこの時感じました。そして、沢山の人に「ヘルプマーク」について知って欲しい。そう強く思いました。

なぜ自分がそう思ったのかと言うと、私も外見では分からない身体の不調があるからです。私は中学二年生の時からヘルニアを患っています。日により痛みの強さは違いますが、辛い時は自分で起き上がることも、寝返りすることも出来ません。学校で、椅子に座っていると腰が痛くなり、十分間同じ姿勢を保つことも難しい日もあります。しかし外見では分からない為、周りの人からの、

「嘘をついている。」

「サボりたいだけ。」

そんな言葉が耳に入る度に悔しくて仕方ありません。足を引きずり歩く自分に向けられる

「かわいそう。」

「若いの。」

と言う言葉と共にじろじろ見られる視線。それはとても鋭く痛いものです。きっとヘルプマークを持っている人も私と同じ様に感じているのだと思います。私は自分と同じ様な思いをする人を減らしたいのです。

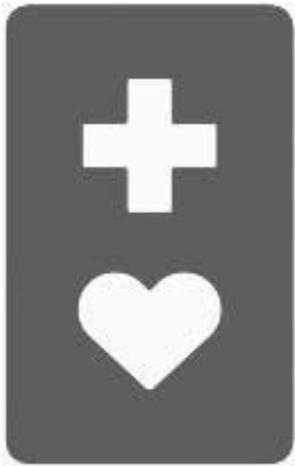
社会には支援を必要としている人が沢山います。ただじろじろ見るのではなく、まずは

「大丈夫ですか。」

と声を掛けて欲しいです。ただじろじろと見られるのは心地良いものではありません。一言声を掛けられることで、それを安心に変えることが出来るのです。「見られている」ではなく「見守られている」と感じられる事が安心につながる一つの方法だと私は思います。また電車で高齢者の人に席をゆずらなかつたり、健康な人が優先席に座っている、点字ブロックの上に自転車停めてある、そんな光景が多く見られます。ヘルプマークと同様にその物の意味をいま一度理解し、社会的なマナーを日頃から守ることが大切だと思います。ヘルプマークは思いやりのバトンであり、そのバトンが次々につながることで大きな優しさのリレーが生まれます。相手の事を考えて行動する人が一人でも多くなれば、健康な人も障がいを持っていても高齢者も、誰もが住みやすい社会になると私は思います。しかし、他人の行動は変えられません。だからまず自分から行動していくことが大切だと思います。私は、これから

「大丈夫ですか？」

と勇気を持って声をかけていくこと、社会的マナーを守ることを実践します。そして自分の行動を見た人が次の行動を起こす。そんな優しさのリレーを沢山作り出し、より良い社会にしていきたいと思います。



神奈川県福祉作文コンクール入選者名簿

小学生の部

優秀賞

福祉を考えた5年生の夏休み おばの耳になる	川崎市立宮前小学校(川崎区)	五年	関
かみの毛・ヘアドネーション	寒川町立一之宮小学校	六年	小島
ぼくの学童は老人ホームとつながっている	海老名市立東柏ヶ谷小学校	二年	佐藤
ぼくの妹	藤沢市立六会小学校	四年	磯部
学校の福祉のじゅ業で学んだこと	小田原市立山王小学校	五年	窪寺
私の弟	松田町立寄小学校	四年	古川
福祉について	大井町立相和小学校	六年	小宮
私でもヘルパーさんになれるよ	横浜市立川和東小学校(都筑区)	四年	石田
父の活動から学んだこと	厚木市立毛利台小学校	六年	岸田
	座間市立相武台東小学校	六年	関咲穂

準優秀賞

弟の小児用バギーをおしてみた！	厚木市立厚本第二小学校	六年	島田
福祉って何だろう	横浜市立新橋小学校(泉区)	三年	上遠野
ひいおばあちゃんのおふろで知ったこと	川崎市立小杉小学校(中原区)	三年	北澤
小さな気づきから生まれる物	開成町立開成南小学校	六年	小野
福祉を体験してみて	開成町立開成小学校	六年	高杉
知ってほしいな、子供用車イスのこと	藤沢市立六会小学校	四年	小島
支え合う	湯河原町立湯河原小学校	五年	大館
大切な物	聖セシリア小学校(大和市)	六年	鈴木
私の挑戦	伊勢原市立比々多小学校	六年	名木
一粒のしずく	開成町立開成南小学校	六年	井上

中学生の部

優秀賞

自分の福祉、周りの福祉
 日常にある小さな優しさ
 「差別」・「偏見」を「ゼロ」に
 髪の毛の寄付
 共に生きる社会
 障がいではない。一つの個性だ。
 僕が受けた福祉と僕ができる福祉
 向き合うこと
 障がい者アートの未来
 普通って何だろう

厚木市立林中学校	三年	成瀬敬人
寒川町立旭が丘中学校	三年	永野咲智
大磯町立大磯中学校	一年	荻村明希穂
秦野市立本町中学校	二年	笠原由衣
寒川町立旭が丘中学校	三年	小柳隼翔
鎌倉市立岩瀬中学校	一年	山根夕奈
藤沢市立鶴沼中学校	二年	阿部豪太
大井町立湘光中学校	三年	浅野ゆうな
葉山町立葉山中学校	三年	石川万太
平塚市立土沢中学校	二年	清水麻帆

準優秀賞

障害のない社会を作ろう
 記憶がなくなる中で
 ダウン症と支え
 私を感じた身近な福祉
 みんなが幸せになるために
 見えないヘルプに気づく為に
 点字ブロックを歩いてみると
 大切な人を思う気持ち
 今だからやるべきこと
 祖父の自主返納

カリタス女子中学校 (多摩区)	二年	石井七葉
伊勢原市立成瀬中学校	三年	園田倅生
寒川町立旭が丘中学校	三年	三浦一太
大磯町立大磯中学校	三年	茂木海帆
厚木市立南毛利中学校	一年	大木優利奈
厚木市立南毛利中学校	一年	八木澤理紗
伊勢原市立中沢中学校	一年	輿儀鈴音
座間市立東中学校	二年	成重芽唯
伊勢原市立成瀬中学校	三年	田村柚果
開成町立文命中学校	三年	梶谷美結

神奈川県福祉作文コンクール入選作品集 令和3年度版

令和3年12月発行

発 行 者 社会福祉
法 人 神奈川県共同募金会
〒221-0825 横浜市神奈川区反町3-17-2
電話 045(312)6339

社会福祉
法 人 神奈川県社会福祉協議会
〒221-0835 横浜市神奈川区鶴屋町2-24-2
電話 045(312)4813

印 刷 神奈川県新聞社
